昭和63年度厚生省心身障害研究
「母子保健システムの充実・改善に関する研究」

母親がもつ育児上の心配事とその対応

― 4か月，10か月，1歳半時点の継続調査より ―

加藤 まち子，鈴木 さち子
松浦 賢長*，平山 宗宏**

1．はじめに

近年、育児書やマスコミ等の育児に関する情報は多く、母親が育児について学ぶ場や機会が多くなってきている。先に我々は、大都市近郊の千葉県松戸市において、乳児を持つ母親に対して生後4か月、10か月時点に育児上の心配事とその相談相手についての調査を行った。それによると4か月時点で48％、10か月時点で65％の母親が何らかの育児上の心配事を有していた。その心配事については、夫や（義）父母等の身内に相談すると答えた者が多く、第1子、育児書をよく利用している者、夫が育児によく参加している者に心配事が多かった。地域の交流が薄く、知識が優先し、乳児の生理・発達が理解出来ずに心配している現代の母親の姿が浮きぼりにされたと考えられる。

今回は、同対象者の児が1歳半の時点で、心配事とその相談相手について同様の調査を行い、4か月、10か月、1歳半時点の育児状況の移り変わり、心配事の内容および対応の変化について検討した。

2．対象と方法

千葉県松戸市に在住する1986年3月生まれの児を持つ母親300名を抽出し、児が4か月、10か月、1歳半時点に、育児上の心配事とその対応に関する質問紙を郵送した。4か月時点の有効回答者は214名、10か月は205名、1歳半は140名であった。その内、4か月、10か月、1歳半のいずれの時点にも回答のあった者は116名であり、以後の解析に用いた。母親の平均年令は29.0±3.9歳、核家族は87.1％、集合住宅に住むもの57.8％、第1子が48.3％であった（4か月の時点）。

3．結果

（1）育児状況の変化：図1
（2）心配事を有している者の変化：図2
（3）心配事の内容の変化：図3
（4）相談相手の変化（10か月と1歳半）：図4、図5

対象は，子どもが成長するにつれ、育児書を利用するものが減り，近隣との交流をこどもを通して持つようになってきていた．心配事を持っているものの数は，若干減っている傾向がうかがえた．心配事の内容は変化しており，昼のミルクに関する心配事が増え，便に関する心配事が減っていた．地域での交流は広がったものの，近隣の母親たちに育児方法に関する心配事を相談するものはほとんどいなったのに対して，医師に相談相手として選ばれていた．

対象は身内や近隣による納得のできる説明や援助が得られにくいという状況におかれていると考えられるが，医療機関を利用することによって心配事を解消しようとするものの割合が増えていることが示唆された．また，対象が実際に子どもを育てたり見たりする経験に乏しいことは否めないが，徐々に地域での交流の幅を広げていきつつあり，さらに交流の場を整備することにより，側面より有効な援助をしていきたいと考える．

千葉県松戸市役所，東京大学医学部母子保健学教室*，日本総合愛育研究所**

図1．育児状況の変化

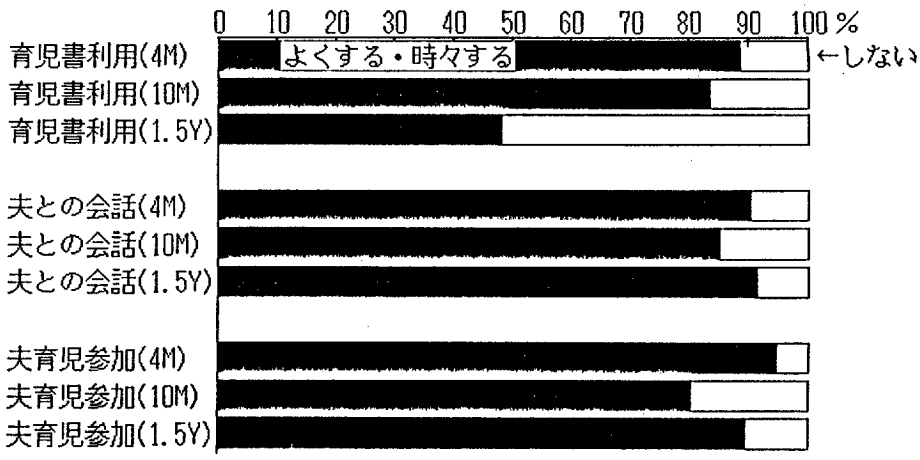


図2．心配事を有しているものの割合の変化

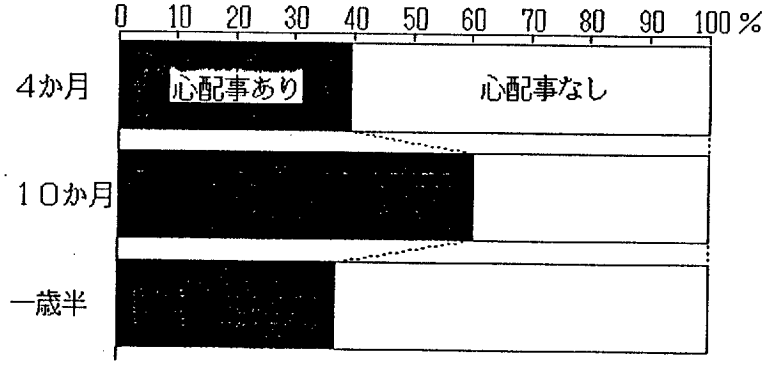


図3．心配事の内容の変化

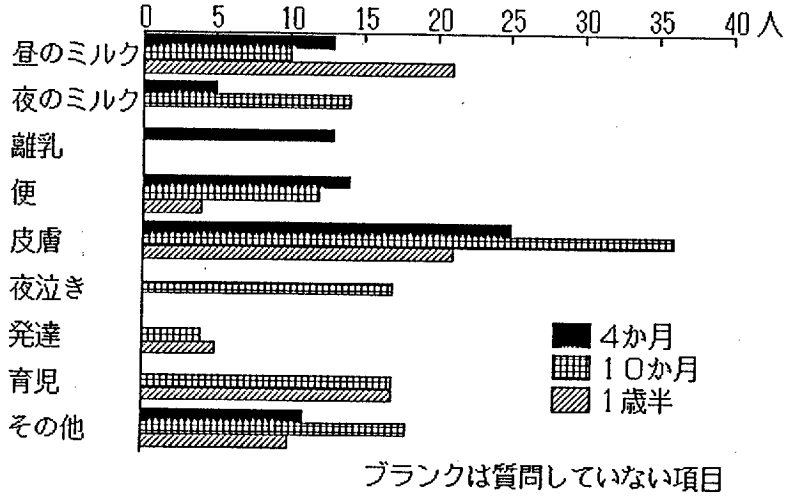


図4．相談相手の変化（１０か月）

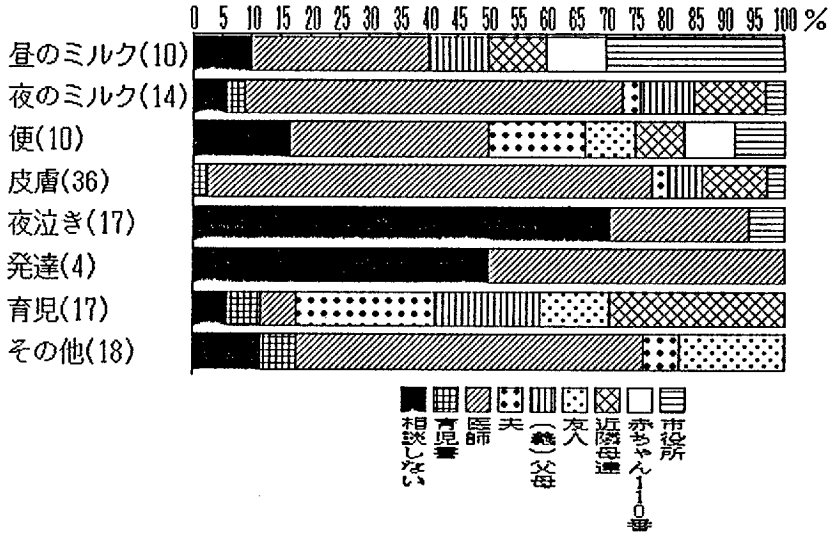
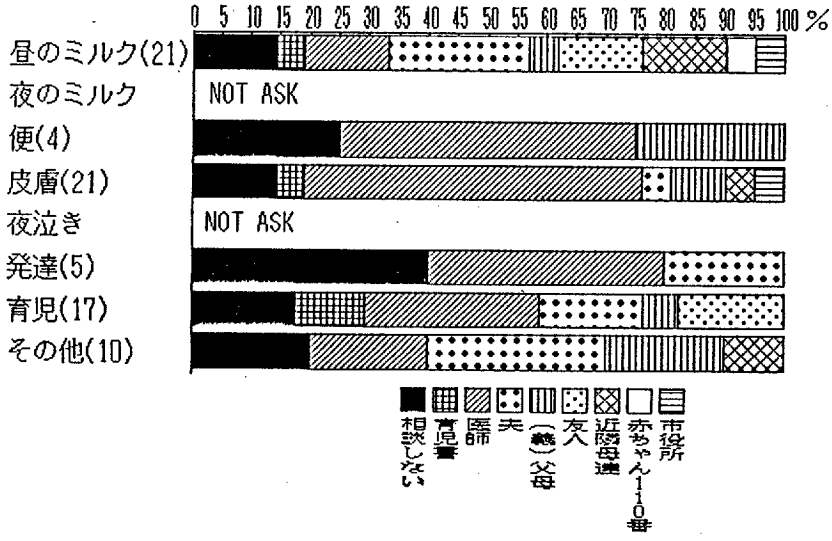


図5．相談相手の変化（１歳半）



検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

１.はじめに

近年、育児書やマスコミ等の育児に関する情報は多く、母親が育児について学ぶ場や機会が多くなってきている。先に我々は,大都市近郊の千葉県松戸市において,乳児を持つ母親に対して住後 4 か月、10 か月時点に育児上の心配事とその相談相手についての調査を行った。それによると 4 か月時点で 48%・10 か月時点で 65%の母親が何らかの育児上の心配事を有していた。その心配事については、夫や(義)父母等の身内に相談すると答えた者が多く、第 1 子、育児書をよく利用している者、夫が育児によく参加している者に心配事が多かった。地域の交流が薄く、知識が優先し、乳児の生理・発達が理解出来ずに心配している現代の母親の姿が浮きぼりにされたと考えられる。

今回は、同対象者の児が 1 歳半の時点で、心配事とその相談相手について同様の調査を行い、4 か月、10 か月、1 歳半時点の育児状況の移り変わり、心配事の内容および対応の変化について検討した。